

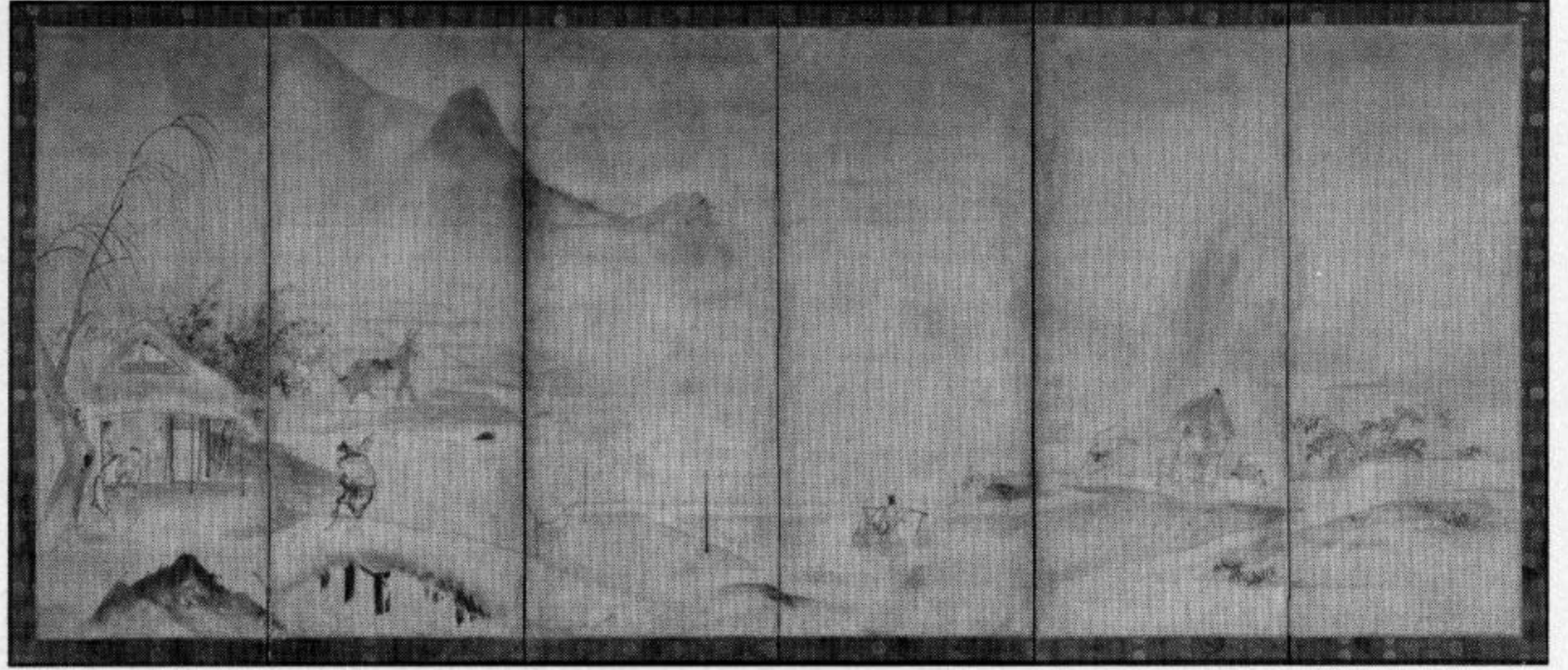
江戸絵画いろいろ



(1) 江戸前期狩野派の流れ

狩野派は室町時代に、中国の影響の強い水墨画と日本のやまと絵をあわせておこった一派である。桃山時代には狩野永徳（1543-90）が出て、織田信長の安土城の襖絵などを描いた。江戸時代のはじめ、狩野探幽（1602-74）から徳川幕府の御用をつとめた。

狩野山雪は永徳の孫弟子にあたる、京都で活躍した画家。久隅守景は探幽の弟子。狩野常信は探幽の甥である。



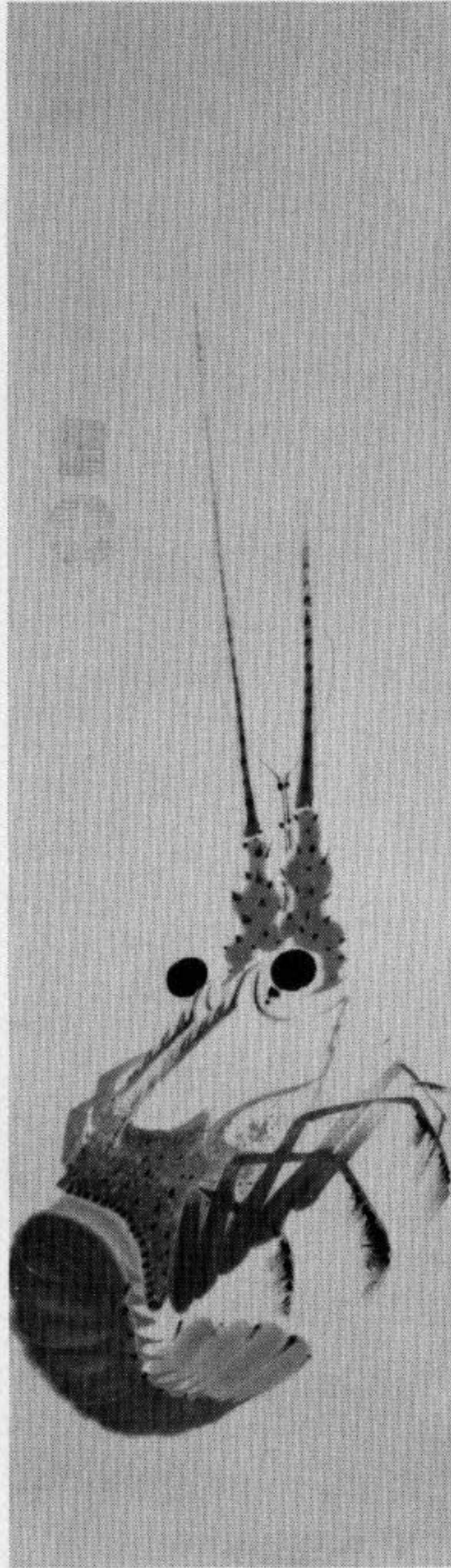
久隅守景「四季耕作図」

(2) 18世紀京都画壇とその周辺

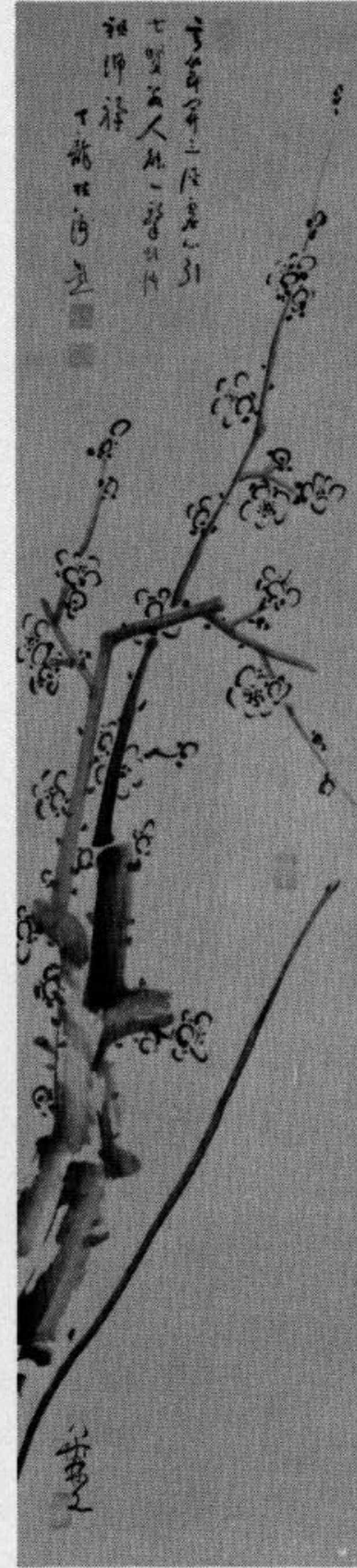
江戸時代中期、ちょうど18世紀頃は文化が成熟し、いろいろな傾向の絵画が描かれた。特に京都では、中国の文人にあこがれた文化人たちによる文人画、写生を取り入れた円山・四条派などの画家が活躍した。

池大雅（1723-76）は文人画の代表的な画家で、池玉瀾はその妻である。紀梅亭は、大雅と並び称される与謝蕪村の弟子。岡田米山人は主に大阪で活躍した文人画家である。

円山応挙（1733-95）は円山派の祖である。長澤蘆雪は応挙の弟子であるが、機知にあふれた画風である。伊藤若冲（1716-1800）は独学で奇想あふれる画風を確立した。松村景文は、応挙の弟子で四条派の祖、呉春の弟である。長澤蘆鳳は蘆雪の孫にあたる。森一鳳は、猿の絵で知られ18世紀に大阪で活躍した、森狙仙の3代目である。



伊藤若冲「海老図」



池大雅「竹梅図」



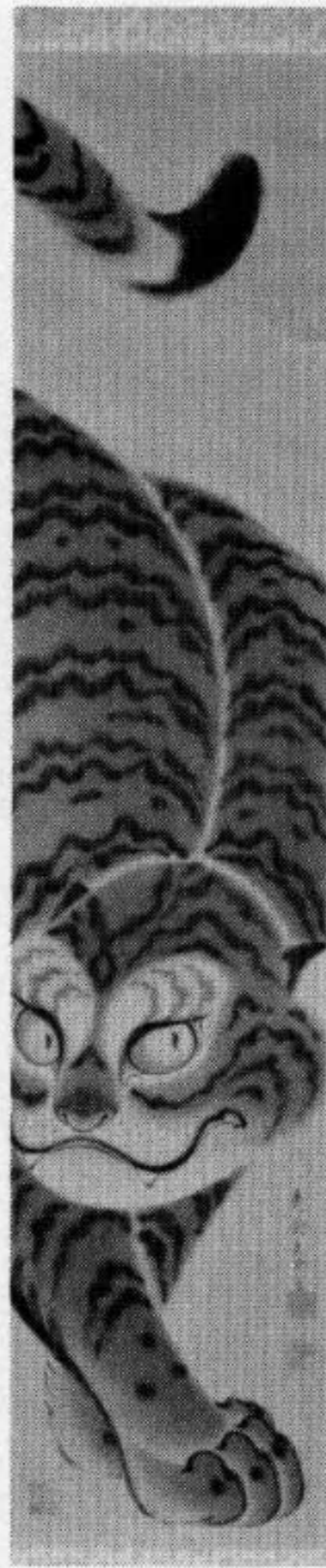
松村景文「秋草図」

(3) 江戸のエキゾチズム

18世紀に登場した新しい傾向の絵画に中国人画家沈南蘋の画風をとり入れた一派がある。濃密な描写の南蘋の画風はエキゾチックなものとして好まれたらしい。

黒川亀玉・諸葛監は江戸の地に南蘋の画風を伝えた。司馬江漢（1747-1818）は洋風画で知られるが、南蘋の画風も学んだ。

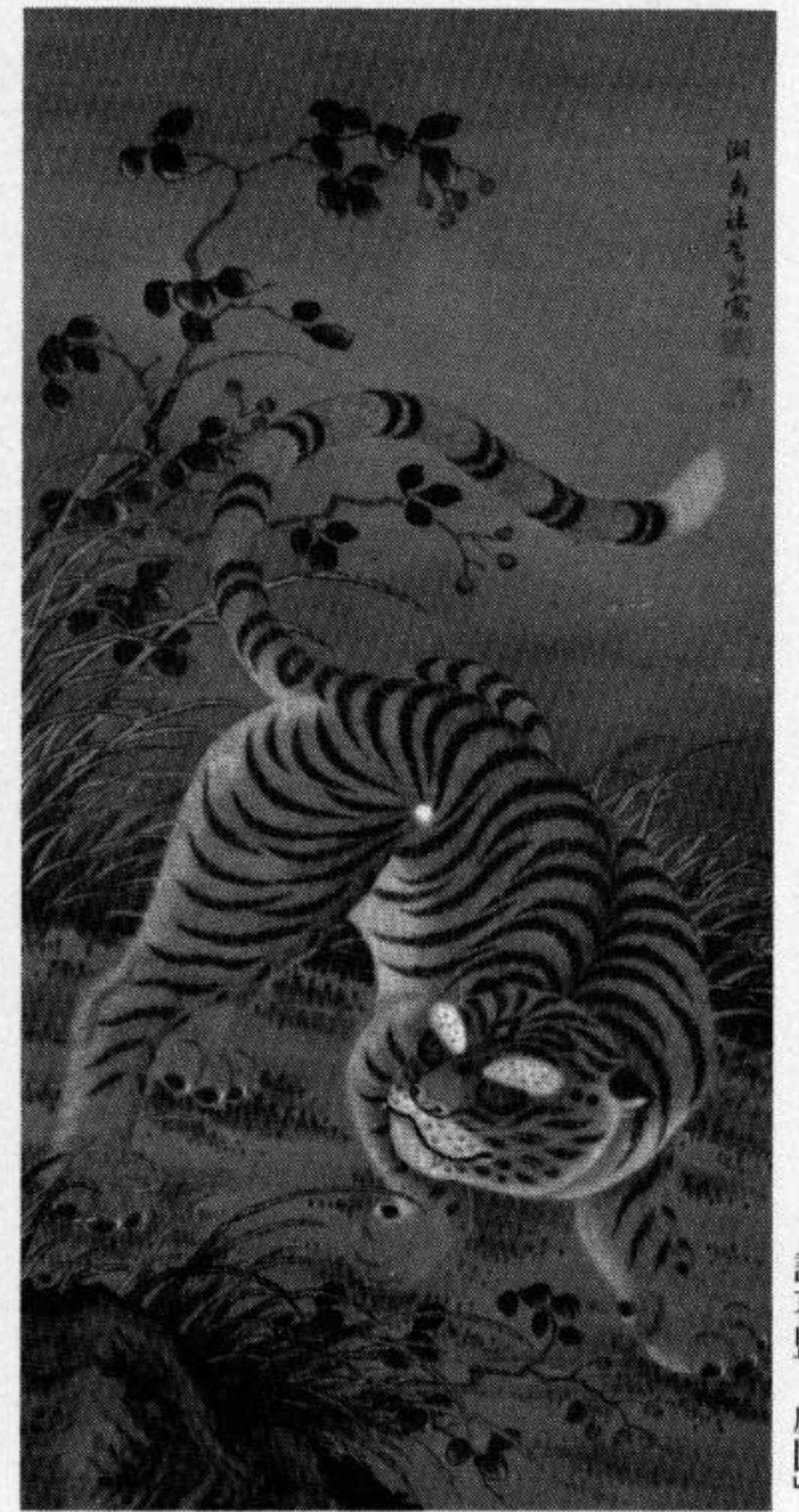
渡辺秀詮は外国への窓口であった長崎で、南蘋の画風とも異なるエキゾチックな作品を残した。



渡辺秀詮「虎図」



諸葛監「白梅小禽図」

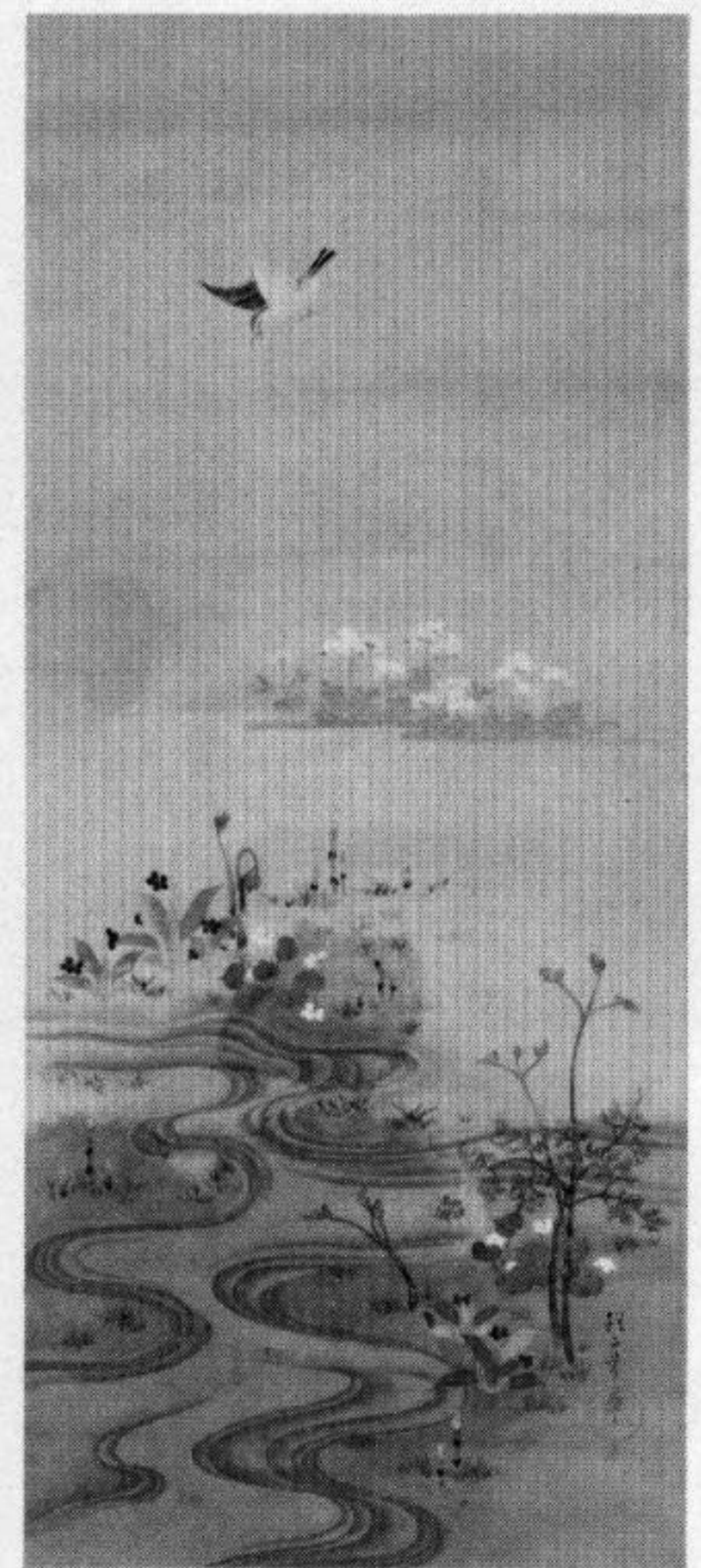


諸葛監「虎図」

(4) やまと絵の伝統

琳派は俵屋宗達を祖とし尾形光琳（1658-1716）が大成し、その後酒井抱一（1761-1829）に受け継がれるが、その根底には平安時代以来のやまと絵の伝統がある。江戸時代後期に古典的やまと絵の復興を志した復古大和絵派は王政復古の政治思想と結びついていた。

鈴木其一は抱一の高弟。田中抱二も抱一の弟子。酒井道一は抱一の弟子の子供である。冷泉為恭は復古大和絵派の画家。

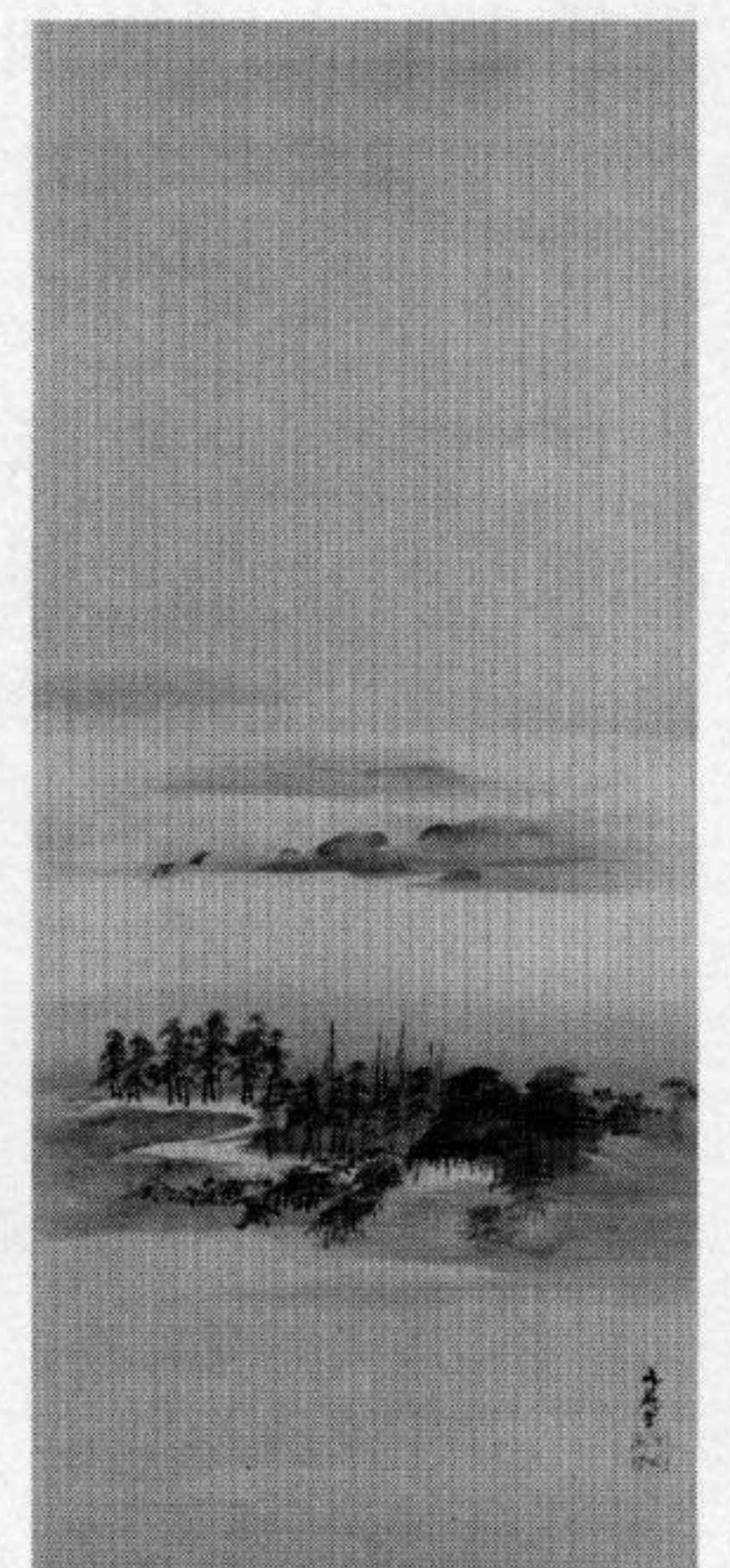
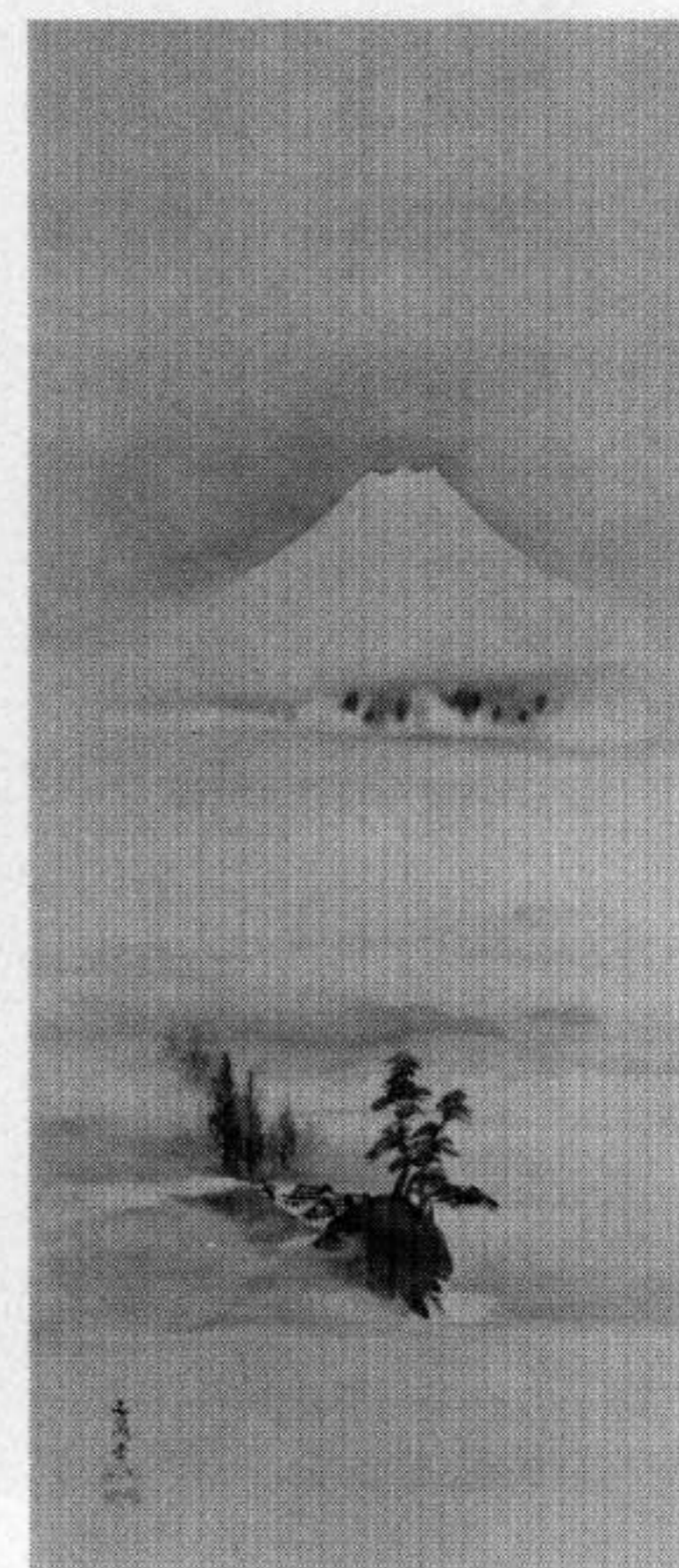
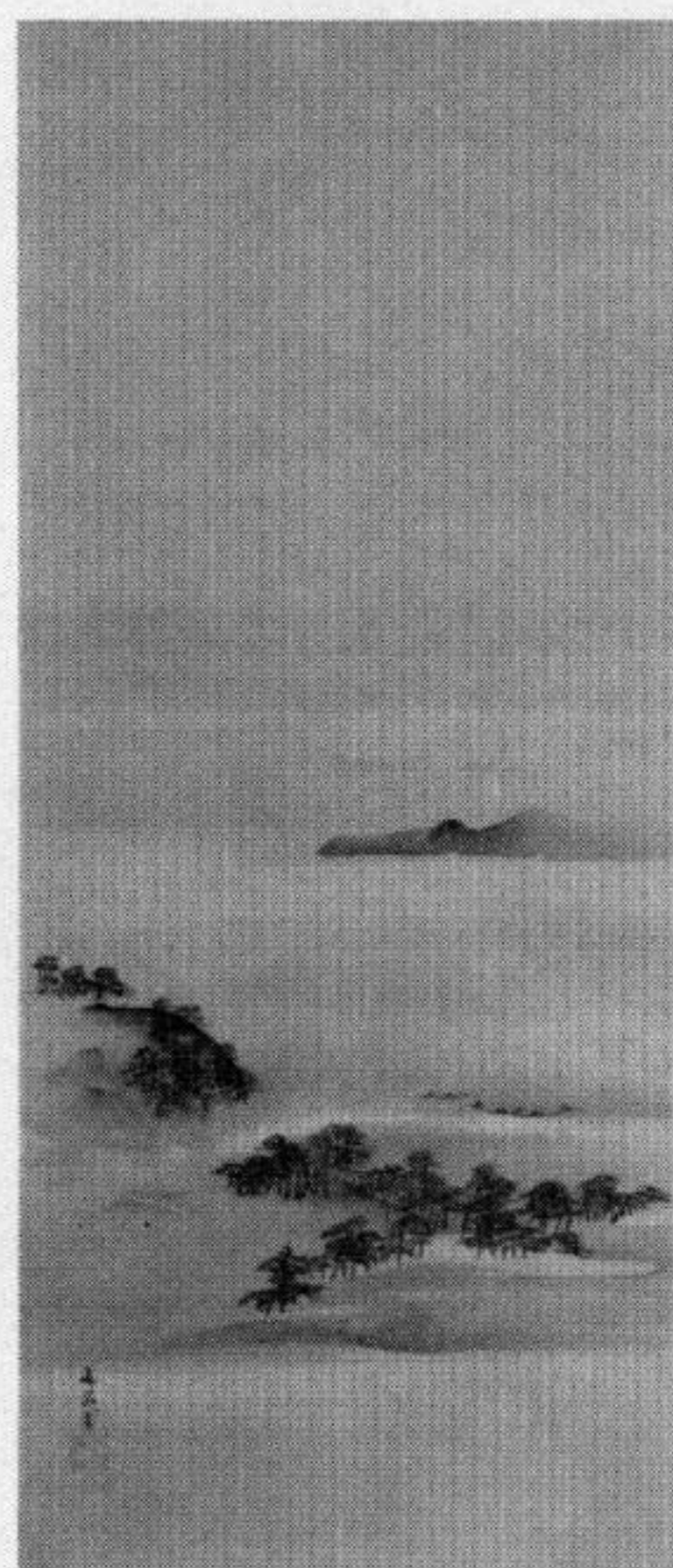


田中抱二「伊勢物語・四季花鳥図」のうち

(5) 関東文人画

日本の文人画はまず当時の文化先進地帯の京都・大阪でおこるが、18世紀も末になって江戸の地でも谷文晁（1763-1841）が文人画の画風を取り入れて、渡辺華山など多くの弟子を育てた。弟子たちは関東地方から東北地方にかけて活躍した。

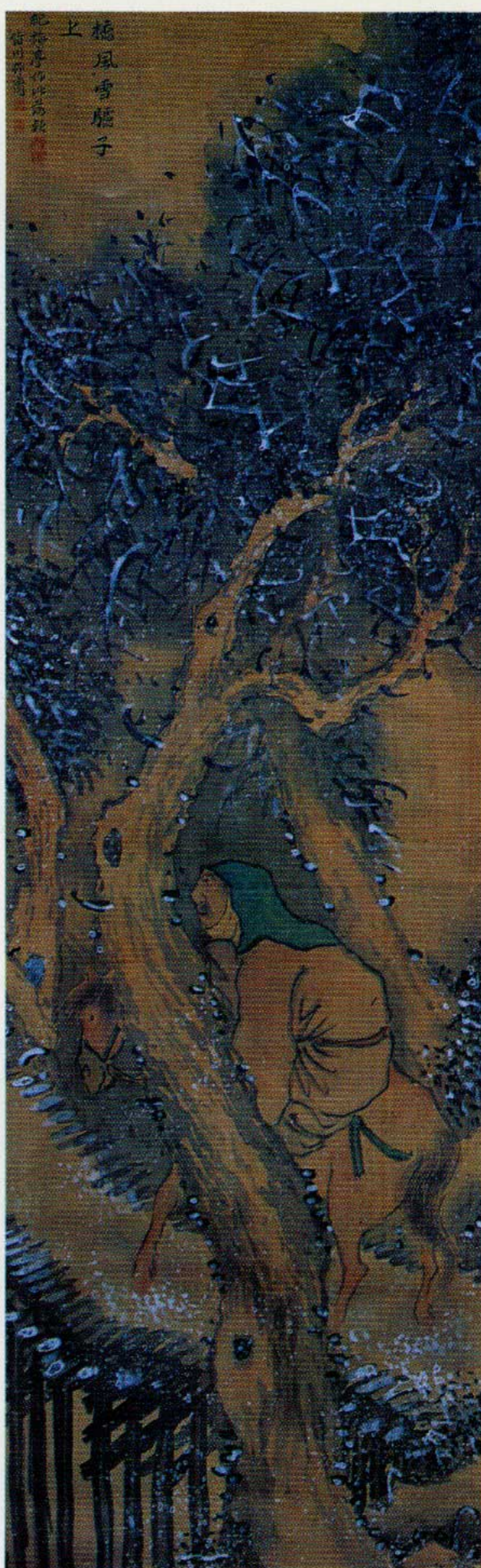
鈴木鶯湖は文晁の晩年の弟子で、下総国金掘村（現在の船橋市金掘町）の出身である。



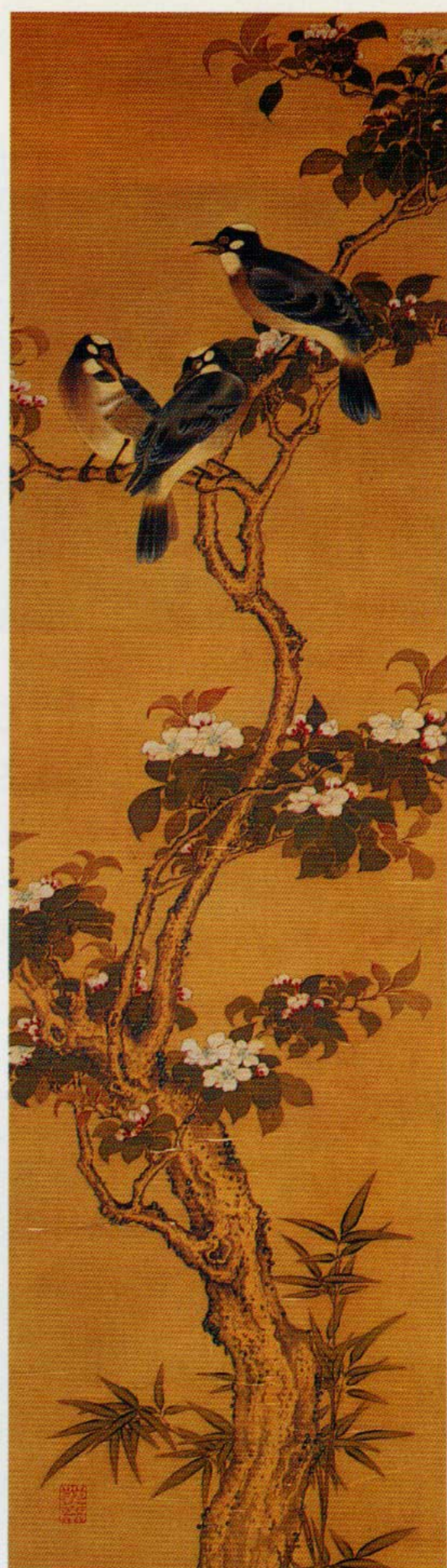
谷文晁「富士三保松原図」



狩野山雪「雪中騎驢図」



紀梅亭「雪中騎驢図」



黒川亀玉「海棠白頭翁図」

次回所蔵作品展のご案内

千葉市美術館では所蔵作品展として1月17日より「肉筆浮世絵の美人たち」を開催いたします。浮世絵といえば版画が中心ですが、多くの浮世絵師は直筆の作品（肉筆浮世絵）も残しています。

歌川豊国「町家二美人図」など約30点の作品を展示します。千葉市美術館の所蔵作品の他に寄託作品も展示いたします。

千葉市美術館・所蔵作品展 近世以降の美術品 Vol.1
江戸絵画いろいろ
1995年12月15日発行

編集・発行 千葉市美術館



鈴木其一「白梅・福寿草図」



鈴木鴛湖「救蟻図」